日本建築学会関東支部第２５回提案競技
シンポジウム（現地説明会）市長挨拶

令和６年１１月９日（土）午後１時３０分～　　ＡＺ熊谷６Ｆ　クマガヤプレイス

御紹介いただきました熊谷市長の小林でございます。

本日は、「日本建築学会 関東支部 第２５回提案競技シンポジウム」にお招きいただき、誠にありがとうございます。

主催の日本建築学会 関東支部の皆様をはじめ、共催の埼玉支所会員の皆様、各種後援団体に所属されている皆様におかれましても、本日の開催に至るまでの企画検討や準備に際し、大変ご尽力されたことと存しお礼申し上げます。

実在の市街地を対象に、今後の「まち」をテーマに建築や都市の専門家、地域に暮らす子どもから大人までが参加する提案競技の場として、建物やまちのことを皆で考え未来を創造する機会にするという理念のもと、今年度は、熊谷市の全域を対象に選定いただき、提案競技に取り組んでいただけることを、市長として大変嬉しく思っております。

また、応募者の方を中心に、様々な地域から熊谷市にお越しいただいたことを重ねて感謝申し上げます。

今回は、建築を学ぶ学生さん、実務者の方、まちづくりに関わる方々を対象とした「建築・まちづくり提案の部」と、子どもから大人まで、熊谷の魅力と希望を引き出してくれる方々を対象とした「写真・絵画コンクールの部」があると伺いました。

早速、本日午前中には、中心市街地の街歩きを行っていただいた、と聞いております。実際にまちを歩いていただいた結果、熊谷市について皆様はどういう印象を持ち、どういうイメージに映ったでしょうか。

熊谷市民として当たり前だと思っている日常的な風景も、熊谷市外からお越しになった方には珍しく、また美しいと感じていただけた要素もあるかもしれません。

反面、市民としては、見慣れたまち並みゆえに不満が少ないと思っていたけれど、初めてお越しになった皆様には、課題点や疑問を抱かれた箇所もあったかもしれません。

私自身も、一生懸命まちづくりに取り組んでおりますが、見落としている点があるかもしれませんので、皆様からのご提案には大きな期待をしております。

また、１月末には提案審査会において、私も特別審査委員として参加させていただくこととなっておりますので、どのような作品が提出されるのか楽しみでなりません。

もしかしたら、熊谷市のまちづくりに関する施策の参考とさせていただく場合があるかもしれませんので、是非とも頑張ってください。

熊谷市政の概要

ここからは、熊谷市の概要や、私の熊谷市政に対する想いについて、お話しさせていただければと思います。

熊谷市の地勢は、埼玉県の北部、東京都心から５０～７０km 圏に位置し、市域の面積は１５９．８２平方kmです。

人口は約１９万人で、市の北部に利根川、中央部に荒川が流れ、水に恵まれた肥沃な大地と豊かな自然環境を有しています。

産業構造は、工業においては製造品出荷額が県内２位、商業においては年間商品販売額が県内５位、農業においては農業産出額が県内３位といずれも県内上位に位置し、バランスの良い産業都市です。

江戸時代から五街道の一つ、中山道の宿場である熊谷宿として栄え、交通の要衝として発展してきた歴史があります。

現在でもＪＲ上越新幹線や北陸新幹線、高崎線、秩父鉄道の４路線が乗り入れ、ＪＲ熊谷貨物ターミナル駅も有しています。

東京駅までは新幹線を使って最短３７分で到着するなど、アクセスは良好となっています。

祭事では、江戸時代中期から続き、関東一の祇園と言われている

「熊谷うちわ祭」が毎年７月下旬の３日間、市街地で開催され、今年も県内外から約７０万人の方にお越しいただきました。

また、戦災復興の願いから始まった熊谷花火大会も、今年で第７２回を数え、８月中旬に開催し、１日で約４０万人の来場がありました。

市政に対する想い

さて、ここからは私の市政に対する想いについてお話しします。

令和５年度から５年間を計画期間とした第２次熊谷市総合振興計画、後期基本計画では、将来都市像を「子どもたちの笑顔があふれるまち熊谷　～輝く未来へトライ～」と定めました。

先人たちが守り、創り、育んできた歴史や文化、自然は、大切な地域資源であり、私たち市民の生活に潤いと生きがい、誇りを与えてくれるかけがえのない宝物です。

次世代を担う子どもたちにこれらの宝物を継承していくことは、私たちの責務であるだけでなく、熊谷市のまちづくり・地域づくりの目標でもあります。

全国的に人口が減少し、地域活力の衰退が危惧されるなか、私は、子どもたちが未来に希望を持ちながら笑顔で暮らせるまちは、全ての世代にとっても安心して心豊かに暮らせるまちだと考えます。

そこで、地域資源を生かした独自性と、自立性の高い持続可能なまちづくりを進めるとともに、子どもたちが郷土愛を育みながら、健やかに育つ都市を目指しています。

ＤＸ（デジタル・トランス・フォーメーション）による市民生活の利便性向上と新たな経済活動の創出と、伝統文化とスポーツによる人々が交流するまちづくり

特に総合振興計画のなかで重要と考える内容について、リーディングプロジェクトを８つの単元を定めました。

本日はそのうち、「ＤＸ（デジタル・トランス・フォーメーション）

による市民生活の利便性向上と新たな経済活動の創出」と、「伝統文化とスポーツによる人々が交流するまちづくり」の２点に関連する内容についてご紹介します。

まず、「ＤＸ」の分野ですが、現在熊谷市では、社会の変化に遅れることなく対応するため、デジタル技術を利活用した環境整備等の「スマートシティ」戦略に取り組んでおります。

これまで国内最高気温となる４１．１度を観測した都市として知られ、長年にわたり「暑さ対策日本一」を目指した取組を進めてきました。

しかし、人口減少社会においても持続可能な都市を実現するためには、市民や来訪者が暑い中でも快適に、楽しく、いきいきと活用できるよう、デジタル手法も活用して、厳しい暑さに対応したまちの活性化に取り組むことが課題であると考えました。

そのため、本市の課題解決に向けて展開するスマートシティ戦略のコンセプトとして、市民目線でデータ利活用を推進し、まちのにぎわいと魅力を創出するとともに、市民にも来訪者にも優しいまち「やさしさ未来発見都市　熊谷」を目指しています。

具体的に取り組む分野としては、「まちの活性化を実現する」観点から３つ、暑さに対応したまちとするため、デジタル手法を活用したまちづくりへの市民参画促進による、公民連携まちづくりの効果的、効率的な実現を目指しています。

また、気象条件を考慮した「スマートエコタウン」等の、省エネ型の建築や街区の導入促進を行います。

モビリティの分野としては、公共交通サービスの持続性の確保、様々な移動手段の連携による移動の円滑化、まちなかの活性化を図ります。

さらに、スポーツ・健康の観点からは、市民の誇りとなり、かつ市外から来訪者を引き寄せる、魅力あるコンテンツを発信するとともに、地域特有の厳しい気象条件のもと、デジタルを活用した効率的で可視化できる健康管理ができる環境を目指しています。

「地域の持続性を確保する」観点からは、安心・安全の分野として、

災害に関連した情報共有の円滑化、デジタル手法による防災意識の啓発、インフラの維持管理を担う技術者の不足に備えた、データ整備に取り組んでいます。

また、産業ＤＸとして、地域産業のＤＸの取組を推進するとともに、ＤＸを支える組織、人材の育成を行ってまいります。

続いて、「スポーツ交流によるまちづくり」の分野ですが、熊谷市の大きな特徴といえば、市内にプロを含むスポーツチームが、４チームも拠点にしていることが挙げられます。

そのため、市民の方が身近にスポーツに熱中できるまちとして、「スポーツ熱中都市宣言」を掲げています。

具体的には、ラグビーリーグワンの初代王者である「埼玉パナソニックワイルドナイツ」、ＷＥリーグで活躍する女子サッカーチーム「ちふれＡＳエルフェン埼玉」、女子ラグビーチーム「ＡＲＵＫＡＳ　ＫＵＭＡＧＡＹＡ」、ＢＣリーグで活躍する「埼玉武蔵ヒートベアーズ」です。

まちを歩くとそれぞれのチームの選手に会う機会も多く、活躍する姿を間近で応援することができますし、熊谷市としてもチーム応援企画やイベントを多数実施し、まちをあげてスポーツを盛り上げています。

また、滑空時間、飛行回数ともに日本一、世界でも第３位を誇るグライダーの滑空場もあります。アニメ映画にもなった大人気漫画「ブルーサーマル」の舞台にもなっているほか、全日本学生グライダー競技大会の会場でもあり、大空で全国の強豪チームが競い合う姿を見ることができます。

これからもスポーツ活動を促進するとともに、熊谷スポーツ文化公園など、恵まれた施設環境を生かし、スポーツコミッションを中核として、大規模スポーツ大会の誘致による交流人口の拡大を図ってまいります。

最近のまちづくりの展開

ここまでは、私の市政に対する想いについてお伝えさせていただきましたが、ここからは最近のまちづくりの展開についてお話しします。

まず、中心市街地から更なる魅力向上を目指す事業として、熊谷市の長年の懸案であり、市長就任以来、力を注いでまいりました北部地域振興交流拠点施設の整備についてです。

本日街歩きの際に、国道１７号線と市役所通線の交差点にある大きな空き地、コミュニティ広場にも寄られたと聞いております。

ここは、埼玉県と熊谷市が共同で整備、調整を進める施設として、「北部地域振興交流拠点施設」という名前のもと、埼玉県北部地域の産業振興などを目的に整備の協議を続けています。

私は、県の機能とともに合同庁舎として、市役所本庁舎機能の一部または全部の移転を行いたいと考えており、それを前提に、現在市庁舎整備の基本構想を策定中です。

次に、利根川新橋の建設によるアクセス向上と企業誘致についてです。

これまで利根川を隔てて隣接する群馬県との往来は、架橋が少ないことから、慢性的な交通渋滞に悩まされていましたが、新橋を建設することで、その緩和に繋がります。

また、大規模災害時の緊急輸送への懸念から、災害時のルート確保が図られ、さらに群馬県東毛地域だけでなく、栃木県南部との結び付きを強め、北関東の広域的な経済圏の形成を目指します。

次に、首都高速道路の熊谷市までの延伸による、産業拠点の実現についてです。

現在の状況は、首都高速道路は、東京都心からさいたま新都心までの間で整備されており、工事が進んでいる国道１７号バイパスの「新大宮上尾道路」区間に、首都高速道路の延伸事業化が決定しています。

そこで、この首都高速道路を、熊谷市までさらに延伸させることで、企業誘致による地域経済の活性化を目指しています。

長きにわたり停滞していた事業が今ようやく動き出したもの、今後実現に向けて積極的に取り組むべきもの、様々ではありますが、私はどの事業も熊谷市の未来のまちづくりには欠かすことのできないプロジェクトだと考えています。

インフラ整備による経済発展を目指し、今後、多くの市民の声をしっかり受け止め、行動すべき時には迅速に、判断が必要な局面においては責任をもって、大きく前進するよう決断しながら、着実に事業を進めてまいります。

今回、熊谷市で開催する第２５回提案競技のテーマは、「ナラティブからひもとくまちづくり」、人の思いの集積が「まち」を形成し、「都市」を動かす、と伺っております。

地域や街、まちづくりに関して、多くの人がそれぞれの物語を継続的に語り合い、繋がりを持てる場を創るという理念であり、このことは、私の市政運営のなかでも、大切にしなければならない要素であると感じております。

結び

結びにあたりまして、改めて本シンポジウムの開催及び提案競技の実施に向けて、御尽力いただきました関係者の皆様に、心から感謝を申し上げますとともに、本日御出席の皆様の益々の御活躍と御健勝を祈念いたしまして、簡単ではございますが、御挨拶とさせていただきます。

※注意：赤色のサブタイトルは、コンペ事務局にて記載しています。